

お玉ヶ池種痘所の設立に参加した 上山藩医 奥山玄仲

深瀬 泰旦

順天堂大学医学部医史学研究室

受付：平成23年10月24日／受理：平成24年2月23日

要旨：お玉ヶ池種痘所の発起にあたって、建設資金を提供した83名の医師の1人に奥山玄仲がいる。玄仲の子孫にあたる奥山氏が所持する系図によって、わずかではあるが知見をえることができた。文化7年に生まれた玄仲は、文政6年から2年間、米沢に遊学。文政11年には短期ながら江戸へ、また天保11年には長崎に遊学した。安政5年のお玉ヶ池種痘所の発起にあたっては、その設立資金を提供し、のちには自宅である芝赤羽根において種痘所出張所を担当していた。明治10年代には大野松齋とともに東都における種痘家として名をなしていた。明治38年に96歳で死去した。

キーワード：奥山玄仲虎位、上山藩校天輔館、「奥山氏系図」、お玉ヶ池種痘所、牛痘接種法

はじめに

お玉ヶ池種痘所の発起にあたって、建設資金を提供した医師の1人に羽田国上山藩医奥山玄仲がいる。しかし現在までにこの人物についての報告は皆無である。玄仲の子孫にあたる奥山氏が所持する系図によって、わずかではあるが知見をえることができたので報告する。

I. 奥山玄仲とお玉ヶ池種痘所

(1) 家系図からみた奥山玄仲

「奥山家系図」によると奥山玄仲はつぎのように記述されている。玄仲は幼名を耕助といい、のちに虎位を名乗った。

虎位（とらたか） 松平山城守信行公御代、養子奥山耕助後改元仲、文政十一子亥四月亡父清満跡式御勝手結被仰付、御扶持八人扶持被成下候、同十二己丑六月二十五日学校主事被仰付候、明治卅八年一月八日没ス、享年九十六才、二男一女ヲ挙グ、長虎炳、次虎章、女玉子

玄仲は伯母のもとに入婿した奥山清満の養子となり、文政11年にその跡式を相続した。文政12年には学校主事に就任しているが、この学校とは文化6年（1809）に開校した上山藩校天輔館——のち天保年間に明新館と改称された——である。

文化6年藩主松平山城守信行は「儒学ヲ尊ヒ常ニ文学ノ振ハサルヲ嘆」いて学校を創建し、天輔館と名付けた。のち天保11年に「学風ヲ一変シテ、朱子学トナリ館名ヲ明新館ト改」めたが、当初からもっぱら漢学を教授する藩校であった。ここに「助読、主事」という職名があり、「共ニ教員ナリ、家格ニヨリテ職名ヲ異ニスルノミ」とあって、それぞれ4、5名がおかれていた¹⁾。「学校主事」とは単なる教員であることがこれによって明かである。しかしこの藩校は漢学を教授する学校なので、玄仲が医学を教授したとは考えられない。

玄仲は系図にしめすように、実は清満の義理の弟——とはいっても清満が奥山氏へ養子にはいつているので、本来ならば奥山氏の直系といえる人物である——直清の子で、「耕助、文化七年庚午年八月六日出生」とある。養子といっても甥が義

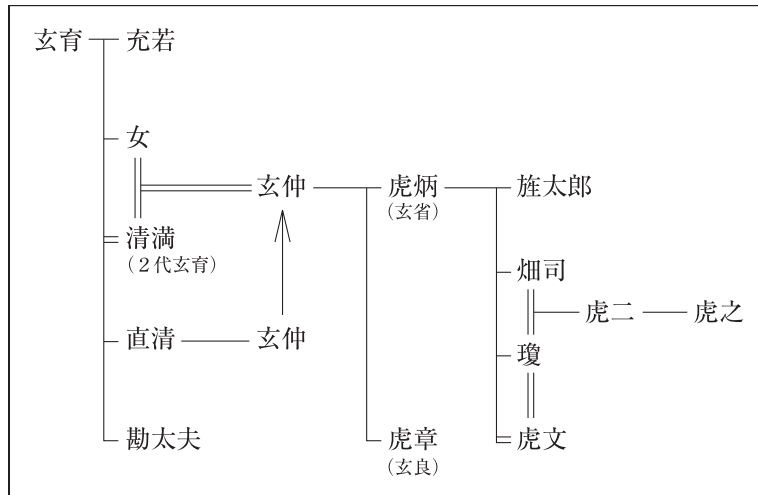


図1 奥山氏略系図

理の伯父の養子にはいったことになる。

本来奥山氏の直系にあたる直清の嫡子が、なぜ傍系ともいえる清満の養子にはいったのだろうか。その詳細について系図にはふれるところはないが、同じ系図の直清の項に「文化七庚午年三月五日不調法之義有之……学校附御免被仰付候」とあって、直清は芳しからぬ所業によって学校付をお役御免になっており、それ以後は奥山姓をすてて吉田姓を名乗っている。そのため家名の存続と医師としての跡目を継ぐため、直系にあたる玄仲が養子にはいったものと思われる。

直清の父玄育には3男2女があった。長男は充若(みつよし)で「同(寛政)八丙辰年八月七日納戸本役被仰付候」とあるように医師ではない。そこで同藩の秋元左馬佐の家臣である土田宗宣の弟にあたる土田玄仲を、次女の婿養子としてむかえた。これが清満である。この清満は系図の記載からは医師という表現はみられないが、玄育(2代)死亡後の文化7年正月18日に「惣領席被召出式人扶持被下置候」とあるように、奥山家の家職である医師の後継者になったと考えられる。長男である充若が同じ日に別家を創立していることによっても、これを裏付けることができる。

(2) 奥山玄仲とお玉ヶ池種痘所

奥山氏系図には奥山玄仲がお玉ヶ池種痘所と関

係をもっていたとの記載はみられない。わが国の医学の歴史において一時期を画するともおられるお玉ヶ池種痘所の発起に参画したという輝かしい経歴が、なぜこのような系図にかき込まれることがないのか、おおいに理解に苦しむところであるが、太田東海や手塚良仙の調査にあたったときも、それぞれの子孫にあたる太田良海や手塚治虫は、先祖の偉業についてはまったく知るところがなかった。

お玉ヶ池種痘所の創設にあたって、その資金を抛出した83名の連名簿が存在し、そのなかに奥山玄仲という名の医師が存在する。しかしこの両者がはたして同一人物であるか否かについては十分吟味しなければならない。

牛痘接種の効果が次第に認められ、接種をうける市民が増加して、和泉橋通の医学所——お玉ヶ池種痘所の後身——1ヶ所ではその需要に応えることが困難になったので、出張所の開設が焦眉の急になってきた。

明治2年6月22日に年寄、添年寄へだされた町触が山崎佐の『日本疫史及防疫史』に引用されている。

従前種痘の良法有之候処種痘一時流行の節は多分の人命にも拘はり候儀にて不便の至に付今般改て左の通種痘所相設候間其最寄へ申出

無洩種痘可為致尤も一日多人数相越候ては差支も有之候間前以名前書差出置候へば順番を以て呼出し種痘可為致候

但種痘一人に付錢三百文可差出尤も貧窮無余儀ものは指出に不及候

神田美倉橋通向柳原	種痘館
種痘館出張所三十間堀三丁目	渡辺春汀
芝赤羽根	奥山玄仲
小石川三百坂	平塚良仙
浅草三間町	大野松庵
深川海辺大工町	桑田立齋
赤坂田町三丁目	生田良順

右の通市中不洩様可申通候²⁾

この明治2年の文書によると明治維新後、牛痘接種は神田美倉橋通り向柳原の種痘館でおこなわれていたが、種痘所をただ1ヶ所にかぎっては市民にとっておおいに不便なので、明治2年6月22日にあらたに6ヶ所の出張所が設けられたわけである。それぞれの出張所の責任者として名があげられている6名のうち、生田良順をのぞく5名はお玉ヶ池種痘所創立の抛金者であり、その後もこの施設と深い関係をもっていた医師たちである。

これらの出張所は、すでに慶応2年(1866)5月23日に徳川幕府によって設立されていた施設の復活に過ぎないことがわかる。それは京橋三十間堀三丁目、小石川三百坂下、浅草三間町、深川万年橋、赤坂田町一丁目、麻布十番真木河岸の6ヶ所であったので、ほとんど江戸時代の施設を踏襲しており、それぞれの医師の自宅が出張所として機能していた。

これによって出張所の開設は慶応2年と断定できるかという、かならずしもそうとはいえない。それを思わせる史料としては「立齋年表」がある。この年表の文久2年の条に、

文久二年壬戌三月、西洋医学所種痘出張所新被仰付、酒井右京亮殿御達、初種日、御小人目付井俗事役池田太冲酒食祝儀出す³⁾

とあって、桑田立齋が文久2年3月に若年寄酒井

右京亮忠口から、新たに西洋医学所出張所を仰せつけられたことをしめす文書である。出張所の開設にあたって小人目付とともに池田玄仲(太冲)が出向いてきたので酒肴をだして持てなしたというのである。他に同様な出張所が設けられたとの言及はないが、その後の経過から考えて数ヶ所の出張所が同時に設けられたことはおおいにありうる。

さらに同様な史料として西洋医学所から同じ酒井右京亮あてに提出された文久2年3月の日付をもつ文書がある。ここには

身元有之者は種痘所え分限相応之寄附金上納仕、既先月中も右金高凡式拾四五両も有之、右之外六ヶ所之出張よりも多寡不同ニ候得共、追々寄附金相納候ニ付、只今之分ニては一ヶ年大凡寄附金三百両位には相成可申⁴⁾

とあって、これによって文久2年3月にはすでに6ヶ所に出張所がもうけられていることがしめされている。

ここでは「芝赤羽根」とある奥山玄仲の住所に注目したい。手塚良仙の小石川三百坂、桑田立齋の深川海辺大工町のいづれも、開業している自宅であることを確認しているの、奥山玄仲の芝赤羽根も自宅を出張所にあてたと考えられ、ここが自宅であるといつてよいであろう。それぞれの出張所は受持地域がきめられており、玄仲の受持は「芝金杉橋より南高輪辺、麻布一円、西久保町、赤坂、青山、渋谷辺」であった。

一方維新後の医師名簿ともいべき『日本医籍』⁵⁾や『日本東京医事通覧』⁶⁾をみると、奥山玄仲が東京府麻布区飯倉5の60において開業しているのを知ることができた。『日本医籍』はその例言にあるように、「全国開業医師ノ氏名及ヒ現住所ヲ詳ニスルノ目的ヲ以テ編纂」されたので、まさに開業医名簿といつてよいであろう。

『江戸切絵図』や『江戸名所図会』などによって幕末の赤羽根(あるいは赤羽)は、明治11年郡区町村編成法によって東京府に区制がしかれたさいの麻布区飯倉五丁目にあたるので、種痘館出

張所にその名のみえる奥山玄仲——これはお玉ヶ池種痘所関係者とみてよい——と奥山元省(虎炳)の父にあたる玄仲とは、同一人物とみてさしつかえない。奥山玄省の住所が「芝赤羽橋」であることは「医学所御用留」にも明示されており⁷⁾、松平山城守の家来であることも文久3年3月29日の歩兵屯所医師に新任されたおりの記事にみえる⁸⁾。これが玄仲と同一地であることによっても、玄省の父玄仲がお玉ヶ池種痘所関係者であることは明らかである。

『職員録』(明治2年12月)の大学校の欄につきのような記述がある。

大得業生 無位 平朝臣虎位 奥山⁹⁾

一方虎炳は中助教の欄に

中助教 無位 平朝臣虎炳 奥山¹⁰⁾

とあって、父よりも長男である虎炳の方がはるかに地位がたかい。これは通常ではありえない状況であろうが、大学東校には親子三代にわたる学生が在学しているという記述があり¹¹⁾、教員にもこのような例は池田多仲と謙斎父子の間においてもみられるところである¹²⁾。

奥山玄仲と虎炳(玄省)の在所である『上山郷土史』には

奥山玄仲は夙に江戸に出て長庵等と同時に長崎に遊び、蘭人「シーボルト」に就き洋医を研究し、帰来東京赤羽橋畔に門戸を張る。彼の非凡なる妙手は一時都下に喧伝し、診断を求むるもの門前市をなすの有様であった¹³⁾。

とあって、この地方で眼科の名手として知られていた医師安達長庵とともに長崎に遊学したというが、これがいつのころであるかは定かではない。この地方にはじめて種痘をひろめたのも長庵であるともいわれているが、それ以上のくわしい記述はない。

玄仲の長男虎炳は天保11年(1840)に長崎で

出生したといわれているので、もしそれを根拠にすれば玄仲の長崎留学もこのころとも考えられるが、シーボルトがオランダ商館の医師として来日したのは文政6年であり、いわゆるシーボルト事件が発覚して日本を追放されたのは文政12年なので、シーボルトから直接に医学を学んだとはとうてい考えられない。

それでは玄仲の長崎遊学が2度あったと仮定して、第1回目がちょうどシーボルト来航の時期に遊学したとも考えられるが、それでは玄仲が14歳から20歳の間のことになり、シーボルトについてオランダ医学を学ぶには年齢がいささか若すぎる。「長崎に遊学」という上の句に、その時期について充分考察をくわえないまま、「シーボルトについてオランダ医学を修めた」という下の句が連なる表記がまみられるが、これではワンパターンの思考にとらわれているといわざるをえない。

虎炳は「弱冠蘭語を家庭に修め」¹³⁾たとあるので、父玄仲からオランダ語の手ほどきをうけたわけで、玄仲にはオランダ語の素養があったといえようが、これを裏付ける史料には接していない。

(3) 奥山玄仲の養父清満(2代玄育)について

奥山玄仲の養父にあたる清満は、さきにも述べたように土田家からの入婿である。清満は文化12年に養父玄育が没し、その跡式をうけて10人扶持をうけた。文政11年正月28日に没しているが、行年は不明である。火葬にふされて上山裏町法円寺に葬られた。

「秦善左衛門日記手控」は「元禄拔書」「文政拔書」「文政手控」の三部からなり、上山藩士秦家の動静をつたえる貴重な史料である。「文政拔書」は正しくは「従文政六未年到文政十二丑年 日記拔書下書」という。編纂は天保時代とおもわれ、編者は第7代秦善太左衛門継寛と推定されている。本書には日付が明記されていないが、ここには奥山玄育という名が散見されるので、それを抄出してみる。

栗川稻荷湯町山王社中へ御移御祈禱被仰付、
奥山玄育（文政6年正月）¹⁴⁾
倅元仲米沢へ勤学願濟（同年6月）¹⁵⁾
新御殿附御医師被仰付之 奥山玄育（文政7
年5月）¹⁶⁾
御勝手詰江召出忒人ふち被下 奥山元仲（文
政8年5月）¹⁷⁾
長野高野金谷三ヶ村洪水御用地流地起返ニ付
無尽村方より頼も有之達之上世話被仰付之
奥山玄育（文政10年2月）¹⁸⁾
御子様御守おみや中奥御側頭被仰付、併御小
姓ニ奥山玄育娘・奥山順右衛門次女被召仕
御手賄ニ相成嶋メ玄秀・奥山玄育・梅津元
泉中奥入被仰付之 嶋メ玄藤・猪又玄丈同
断（文政10年6月）¹⁹⁾
砂入場起返頼母子世話致候ニ付御米被下 奥
山玄育（文政10年7月）²⁰⁾
病死 奥山玄育（文政11年正月）²¹⁾

奥山玄育（初代）は文化11年11月24日に死亡しているため、ここにある玄育は、すべて初代の娘に入婿した土田玄仲であり、のちに改名した清満であり、これが2代目玄育を襲名した。系図には玄育を名のつたとする記述はなく、その日を特定できないが、清満が2代目玄育を襲名していることはまちがいない。

これによると2代玄育（清満）の倅元仲（玄仲）が文政6年（1823）6月に米沢へ勉学におもむき、2年後の文政8年5月に帰藩して勝手詰を命ぜられて2人扶持をくだされている。これは玄仲の14歳から16歳のことである。

直清の兄充若を系図についてみると、寛政2年2月23日に上山藩主松平山城守信古の御目見格を仰せつけられ、12俵2人扶持をうけた。寛政6年正月18日納戸役見習、同年2月1朔日御目見格となり、寛政8年8月7日納戸役をおおせつけられた。さきに述べたとおり、この経歴によって医師でないことは明らかである。

寛政8年12月に藩主が山城守信愛（のぶざね）に代替りした。寛政11年6月朔日勝手詰となって2俵の加増があり14俵2人扶持となった。文

化2年7月に藩主がかわり信行となり、文化4年12月12日にはさらに2俵の加増があって16俵2人扶持となった。長男でありながら家職である医師をついでいない。

(4)「分限帳」にみる玄仲

松平信庸時代の分限帳が『上山年代略記』に収録されている。これは年代が明記されていないが、信庸が藩主の時代は文久2年から明治元年で、この時期の総勢372名の家臣の名が列記されている²²⁾。ここの「大小姓」の欄に「高八人扶持 奥山玄仲」がある。役職名によって藩士が列記されているが、医師、あるいは奥医師という区分はみられない。氏名をみるとおそらく医師と思われる藩士が、番方の欄にも役方の欄にも散見されるので、医師たちもそのような分類によって格付けされていたのであろう。

2代玄育が文政11年（1828）正月に病死したのち、19歳の玄仲がその跡式におさまり勝手詰を仰せつけられた。同年6月に、医学修業のため江戸にでることをゆるされているが、文政12年6月に玄仲は国元の学校主事を命ぜられているので²³⁾、江戸での医学修業はわずか1年であった。

玄仲がお玉ヶ池種痘所発起にあたってその挙に参加しているのは、江戸詰の上山藩医として江戸に在住していたことをしめすものである。そのころの各藩の藩医は、藩医としての公の勤務のかたわら開業医として市井の住民の治療に従事することが許されていたので、玄仲もこれに倣っていたものと思われる。もっともその開業形態はそのころの例にもれず、自宅での通い療治ではなく、往診を主にしていたものであろう。

玄仲が在府の医師として江戸に在住するようになった時期をしめす史料はないが、『上山郷土史』によると、長男玄省は「幼時父玄仲に随ひ東上して林藕潢（小林家）の塾に学び、転じて安積良斎、安井息軒の門に入る」¹³⁾とあるので、この年を特定することはむずかしいが、漢学の修業をはじめ年齢から考えると、およそ玄省の10歳から15歳のころ、すなわち嘉永3年から安政2年のころと考えられる。玄仲がこのような年齢の子弟をと

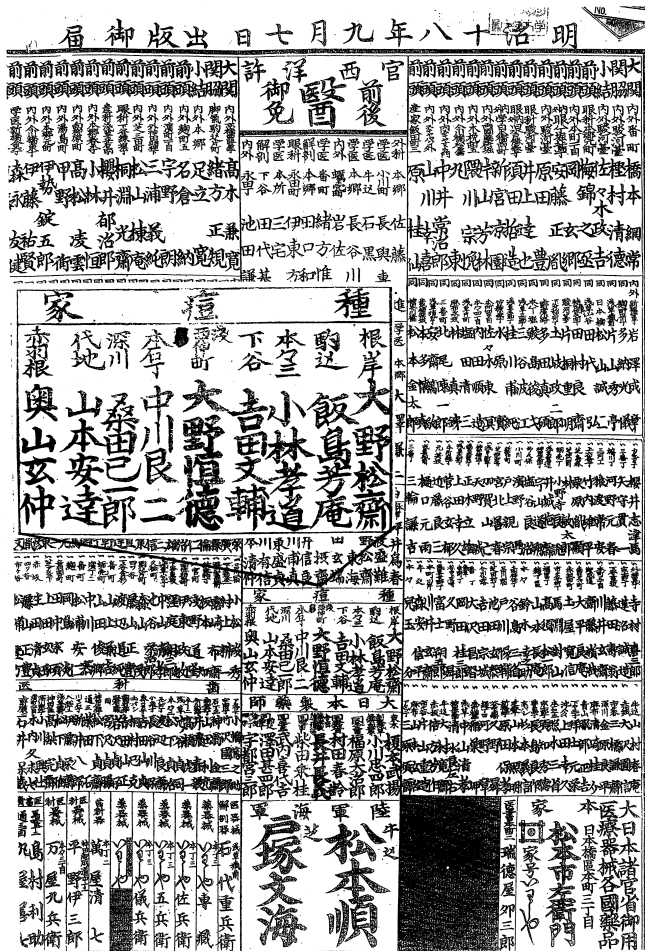


図2

もなつて江戸に出てきたのは、このときに在府の医師を命ぜられたといえようか。

さらにどのような人脈によってお玉ヶ池種痘所発起に参加したのかについては、現在までに偶目した史料によっては明らかにすることはできないが、種痘所医師の一員として、芝赤羽根の自宅において種痘所出張所を引きうけるほどの有力メンバーの1人として、受持区域の住民のために精力的に牛痘接種活動に力をいれていた。

蛇足ながらさきの分限帳には玄仲の長男玄省(虎炳)の名も次男玄良の名もみえない。玄省は文久3年に歩兵屯所附医師として幕府に仕える身となるので、この年にはすでに藩籍をはなれていたとも考えられるので、あるいはこの分限帳は文久3年以降のものとも考えられる²⁴⁾。

II. 明治期の奥山玄仲

長男奥山虎炳は明治9年(1876)に海軍を退官してから父の開業を手伝っているが、その場所は「芝赤羽根」である。また「東京医家雷名鏡」²⁵⁾には種痘家の欄に大野松齋とともに玄仲の名があり、その住所は芝「赤羽根」である。76歳になった玄仲が、そのころも種痘家として東都で名をなしていたということが出来る。このような令名を保ちえたのは、お玉ヶ池種痘所において培われた牛痘接種の技術が長い年月を経てもけっして衰えていなかったからと考えられる。玄仲は明治38年(1905)1月8日に病歿した。96歳の長寿をたもった一生であった。

次男奥山玄良が医学の修業や英語の習得をした

場所については不明であるが、玄良は英語が堪能であった。幕末、横浜軍陣病院においてウィリアム・ウィリスの通訳をつとめていたこともあり、明治2年にウィリスが鹿児島医学校に赴任したおりに、高木兼寛はウィリスについて英語を学び、奥山虎章について英書の輪講をおこなったという²⁶⁾。またそのころに繁用されていたロブリー・ダングリソンの英語辞書を翻訳して『医語類聚』として出版している²⁷⁾。

お玉ヶ池種痘所の発起にあたっては江戸にすむ83名の医師が、その技術と資金を提供した。その1人である出羽岡上山藩医奥山玄仲について、

奥山家系図と分限帳によって経歴を明らかにすることができた。旧幕時代に身につけた牛痘接種の技法によって、明治維新後も東京市民のために種痘事業を継続していた。

本論文の要旨は1997年第98回日本医史学会総会において発表した。

奥山氏系図の披見を許され、かずかずの助言をいただいた、奥山玄仲の曾孫にあたる奥山虎二先生に心からの謝意を表す。

奥山玄仲略年譜

・文化7年(1810)	1歳	8月6日 生まれる
・文政6年(1823)	14歳	米沢に遊学する(2年間)
・文政8年(1825)	16歳	勝手詰2人扶持
・文政11年(1828)	19歳	跡式勝手詰8人扶持 江戸に遊学する(1年間)
・文政12年(1829)	20歳	学校主事
・天保11年(1840)	31歳	長崎に遊学する
・安政5年(1858)	49歳	お玉ヶ池種痘所の設立に参加する
・万延元年(1860)	51歳	8人扶持
・慶応2年(1866)	57歳	芝赤羽の種痘所出張所を担当する
・明治2年(1869)	60歳	大学校大得業生となる
・明治9年(1876)	67歳	長男虎炳が父の開業を手伝う
・明治18年(1885)	76歳	東都において種痘家として名を馳せる
・明治38年(1905)	96歳	1月8日 死去する

注と引用文献

- 1) 文部省. 日本教育史資料1. 1890. p.840-844
- 2) 山崎佐. 日本疫史及防疫史. 東京: 克誠堂: 1931. p.298
ここにある平塚良仙は手塚良仙の誤植で、手塚治虫の曾祖父にあたる手塚良仙光亨である。
- 3) 桑田立斎. 立斎年表. 日本医史学雑誌 1999; 45(1): 85-98
- 4) 池田文書研究会編. 東大医学部初代総理池田謙齋 池田文書の研究 下. 京都: 思文閣出版: 2007. p.677-680
- 5) 内務省衛生局. 日本医籍. 1889. p.15
- 6) 工藤鉄男編. 日本東京医事通覧. 東京: 日本医事通覧発行所: 1901. p.36
- 7) 手塚良齋. 医学所御用留 (1). 日本医史学雑誌 1998; 44(1): 91-96
- 8) 手塚良齋. 医学所御用留 (9). 同上書. 2006; 52(2): 315-318
- 9) 職員録 明治2年12月 須原屋版 寺岡寿一編 明治初期の官員録・職員録 第1巻 東京: 寺岡書洞; 1976. p.239
- 10) 同上書 p.235
- 11) 鈴木要吾. 蘭学全盛時代と蘭疇の生涯 東京: 東京医事新誌局; 1933 p.178
- 12) 池田文書研究会編. 東大医学部初代総理池田謙齋 池田文書の研究 上. 京都: 思文閣出版: 2006. p.6
- 13) 渋谷光雄. 上山郷土史. 昭和2年 上山市史編纂資料 12巻 1955. p.223
- 14) 上山市史編纂委員会編. 泰善左衛門日記手控. 上

- 山市史編集資料④ 1973. p.122
- 15) 同上書 p.125
- 16) 同上書 p.136
- 17) 同上書 p.143
- 18) 同上書 p.155
- 19) 同上書 p.158
- 20) 同上書 p.159
- 21) 同上書 p.162
- 22) 岡村如風『上山年代略記』1931
本書は『続上山年代略記』とあわせて『上市市史編集資料2』として昭和47年に発刊された。分限帳はp.127-139に収録されている。
- 23) 秦普左衛門日記手控。同上書 p.174
- 24) 深瀬泰旦。海軍大医監 奥山虎炳(1840-1926)。
日本医史学雑誌 1995; 41(3): p.321-347
- 25) 「東京医家雷名鏡」東花堂 1885。順天堂大学山崎文庫蔵
『山崎文庫目録』には請求番号6177「東京医家雷名鏡」としてあげられているが、図にしめすように本紙は「官許西洋医前後御免」となっている。この番付の内袋には「明治十八年出版／東京医家雷名鏡／東花堂」とあるので、目録はこの内袋からとったものと思われる。
- 26) 近藤修之助編。明治医家列伝 第1篇。1892. p.156-174
- 27) 深瀬泰旦。『医語類聚』の著者 海軍大軍医奥山虎章。日本医史学雑誌 1996; 42(1): p.29-47

Genchu Okuyama: One of the Founders of Otamagaike Vaccination Institution

Yasuaki FUKASE

Department of Medical History, School of Medicine, Juntendo University

Genchu Okuyama was one of 83 founders of the Otamagaike Vaccination Institution. It has been asserted that little is known about his life, and this paper summarizes his biography, based on previous biographical sketches. Okuyama was born in 1810 and studied medicine in Yonezawa for two years and then studied in Edo and Nagasaki. He furnished some money for the establishment of the Otamagaike Vaccination Institution and supported one of its branches. In the Meiji-era he was famous as a vaccinator in Tokyo.

Key words: Genchu Okuyama 奥山玄仲虎位, Tempokan 天輔館, Genealogy table of the Okuyamas, Vaccination, Otamagaike Vaccination Institution